

登場人物

映画監督 風間重兵衛

プロデューサー 蓋河久子

チーフ助監督 綾部

助監督見習い 坪井朔太郎

脚本家 円山宗一郎

アシスタント・プロデューサー 室井朋子

ウエイトレス

映画評論家 竹脇議

黒子カメラマン

黒子

往年の大スター 馳一生

戯曲

『スタニスラフスキー探偵団』

原作 細野 辰興

台本 細野 辰興

中井 邦彦

○喫茶店「ルノワール」・会議室

舞台が明るくなると横一列に七個ほどの滑車付きのソファと小さなテーブルが幾つか置いてある。

黒子の衣裳を着たカメラマンが徐に現れ、定位置に着く。一旦、暗転し明るくなると映画監督・風間重兵衛、既に席について電話で誰かと話している。

縦横無尽に撮影をしていくカメラマン。

風間「解かっております。今のこの国は日本ではありません。常識も想像力もなく、まともに日本語の話せない若者。かと云って英語が話せる訳でもなく、毛髪を金色に染めた国籍不明のモンゴリアンの巢窟となりさがっております。そして、かれらを叱ることが出来ない子供のような大人たちが犇き合っているばかりです。男も女も己の欲望を解放することしか考えず、相手のことは置き去りにし、結局、本当の自分が解るはずもなく、また解ろうともせず、故に本当の自分を曝け出すことも出来ず真に愛し合う前に別れてしまうばかりです。ですから、この作品を、『貌斬り』を創ることによってこの国の本当の美しさ、この国の人間関係の本当の素晴らしさを、……そうです、日本は、あの昭和の黄金期の日本映画

と共に消え去ったのです。だからこそ、だからこそ私は……」

男の声「よっ！風間屋ッ！」

風間「何奴!? 映画監督風間重兵衛と知つての狼藉か!?」

脚本家・円山宗一郎、花道から登場。

円山「私ですよ、円山です。」

風間「え? ああ、円さん。……花道からの登場とは聞いてなかったものだから」

円山「ああ、急に言われたもので」

風間「(ばつ悪く)いつから、居ました?」

円山「フフ、大分、前から。」

風間「……すっかり売れっ子になってしまった円山先生にまさか今回の脚本直しにまで付き合ってもらけるとは思ってもいませんでしたよ。さあ、出発しましょうか。今頃の伊豆は雪化粧かも知れませんよ。アレ、綾部と一緒にではなかったのですか?」

円山「ほほう、と云うことは何も綾部君から聞いていないということですね。」

風間「はい?」

円山「今回のホン直しは、ここでやるそうです。」

風間「ハハハ? からかわないで下さいよ。言っている意味が良く分かりません。そりゃあ、今回のホン

直しにしたって、あそこを直せ、ここをこうしろと映画界の大先輩である円山さんに指示する私は気に触る男かもしれませんよ。しかし、これは映画監督としての責務であり役割なのですから」

円山「からかつてませんよ、本当に、ここでやるそうですよ。ルノワールのこのレンタル会議室で。」

風間「なんと!」

円山「不況のせいではないですよ。スポンサーがなかなか集まらないでしょう。山城荘に籠るのではなく、ここに毎日通うということになるみたいですよ。」

風間「通う? 我々が、このルノワールへ?! 冗談じゃない、この『貌斬り』は、正式なゴーサインはまだとはいえ、単館レイトでかける作品じゃないんだ。全国公開の作品なんだ! 宿に一年や二年籠るくらい、どうにでもなるはずだ。綾部を呼んでください!」

円山「彼に当たっても仕様が無いでしょう、一介の助監督なんだから」

風間「助監督と云ってもチーフなんだからそのくらいのことではプロデューサーと渡り合って勝ち取る位の度量がなければ駄目なんです。特に私のチーフをやるのなら。」

円山「ふふふ、貴方の言動を見てみるとあの方を思い
出しますね。まるで、二人とも恐竜だ。もっともあ
の方はジュラ紀のスーパーザウルス、貴方は哺乳類
の時代に生き残ってしまったネッシーというところ
ですか。」

風間「映画界は氷河期に入って久しいですがね」

綾部が自失呆然と入って来る。(遅れてウエイ

トレスも入る)

風間「綾部、俺が、こんな所でホンが書けると思って

いるのかよッ、」

綾部「え？ あ、監督！」

風間「『あ、監督！』って、何だ、そのリアクション

は。お前、誰に会いにここに来たんだよ？」

綾部「済みません、ルノワールがお気に召さないなら

スタバにしますので。」

風間「スタバがお気に召さないなら？」

綾部「ドトール」

風間「ドトール、嫌」

綾部「ミスド」

風間「論外」

綾部「ペローチエ」

風間「死んでもイヤ」

綾部「…ああ、どうしましょう。…まさか、まさかマ

ク・ドナルドでは!？」

風間「何年、俺の助監督やっているだん！ モスバに

決まってるだろう。これ以上モスバパーガーが減って

いくと俺困るんだよ」

綾部「打倒！ マク・ドナルドッ。」

風間「綾部！もつと本質的な事で悩め。俺に何か伝え

てない情報があるだろう。…少し時間を与えるから

正直に全て話せ。」

と席を立つ。

風間「急に催して…トイレは何処だッ。」

水を出しに来たウエイトレスが誘導する。

円山「…綾部君、その様子だと未だ他にも何かありそ

うだね。」

綾部「では、円山さんは未だ何も蓋河プロデューサー

から聞いてないんですか!？」

円山「嫌な予感。亦、主演俳優がホンに関して何か言っ

ているんだね。」

綾部「凄い、何故わかるんです？」

円山「君の様子とこの状況で判らんようでは脚本家失

格だろう」

綾部「恋愛の要素が少ないそうです」

円山「ふふふ、人は自分ないものを求める、と云う

のは真理なんだね。恋愛という面じゃないよね、う

ちの主演俳優は。俺はこういうホン屋だから直せと

言われれば直しもするさ。誰かにチェンジされたり

企画が潰れるよりはマシだからね。譬え名前が作品

に載らずともギャラと印税だけは欲しいからね。し

かし、風間監督は黙ってはいないだろう。」

綾部「降りたきや降りてもいいって。高田健二が監督

やりたいらしいんですよ」

円山「まったくなんだって、役者はみんな監督やりた

がるのかね。チャップリンの時代ならいざ知らず、

ストーリーも感情表現も複雑になっている現代で

は、主演しながら監督なんて、無理に決まってるの

に。こりゃあ、今日は荒れるぞ」

綾部「それを思うと、…僕、帰ります。」

円山「しかし、そんなことまで君が監督に伝えなけれ

ばいけないのか!？」

綾部「僕から伝えたほうが、監督も怒りやすいじゃな

いですか。ひとしきり怒らせてガス抜きしてから、

その後で蓋河さんが話すと云うパターンですよ」

円山「差別するわけじゃないけどさ、女のプロデュー

サーって、そういう所好きになれないな」

風間がトイレから戻ってくるが、円山に対して

口に指を当てる。合点する円山。

気づかず話し続ける綾部。

綾部「けどこの企画を、戦後最大の芸能スキャンダ

ル、馳一生の顔斬り事件を全国公開させようってい
うんですから、やっぱり蓋河さんは凄いですよ」

田山「今回のホン直しで、どうにか会議を通過できる
ようなものにしたんだろかね。普通通らないもん
ね、こういうアナキーな企画。日本に限らず、ト
ップスターの移籍問題を扱うのは御法度だからね。
監督も好きだよね、こういうの」

綾部「オリジナルに拘って、もう十年の空白。撮れる
だけでも良しとすべきだ、と言うと叱られるので
しようが」

田山「でも風間監督みたいな人が、こういう企画で映
画撮れる環境も必要だ」

綾部「そうなんです。僕も面白いと思うんですけど
ね」

田山「ほう、カチンコを打つのが精一杯で監督の前に
立塞がって芝居を見る邪魔をしていた綾部君がそう
いうことを考えるようになったとは」

綾部「ええ、いつまでも助監督じゃないだろうって気
もありませんからね」

田山「へえ、時が経つのは早いもんだね。ところで綾
部君って独身でしょ？ 結婚しないの？」

綾部「いや僕は、相手いないですから」

と初めて風間に気づく。

風間「綾部、俺の注文しただろうな？」

綾部「勿論です。前もって人数分の飲み物を注文して

おかないと、このスペースは借りられませんので。

コーヒー頼んでおきましたので。二時間を超えたら

更に一人一品追加注文です。」

風間「…どうでもいいけど、ブルマンなんだろう

な？」

綾部「あ、えっと、すぐ確認してきます」

綾部、出て行く。

風間「蓋河大プロデューサー、来ないつもりじゃない
んでしょかね」

田山「全てが済んだ頃にやって来るのが、彼女のやり

方だろう。」

そこへプロデューサーの蓋河久子があたふたと

入ってくる。

蓋河「(携帯で話しながら) 何よ、何よその言い方。

私を女だと思ってそう云う口の利き方するんだった

ら全部白紙に戻すわよ！ だからその理由を調べ

てって言うてるの。…そう、そうよ。…今日中に」

田山「ほう、全てが済まないうちにやって来ました

ね」

蓋河「駐車場がどこも一杯で、すいません。それでど

うです、進みます？ ホン直し。」

風間「大切な話を綾部に託して自分は自動車移動とは

太平楽すぎるんじゃないのか、蓋河さん？ 第一だ

よ…」

蓋河「(風間を制して) ああ、はい、分かっています。

仰られることは分かっています。ただ、ちよつと恋

愛場面を増やしてくれればいいというだけで、何も

そんなに大きく変える必要はないですから」

風間「恋愛場面？ 何のことだ!」

綾部、戻ってくる。

綾部「ブルーマウンテンでした。…蓋河さん!」

蓋河「綾部君さっきの話、伝えてくれてないの？」

綾部「あ、まだです。すいません」

風間「どういうことだ! 恋愛場面とは?」

綾部「すいません!」

風間「まさか、今日はその為の集まりだって言うん

じゃないだろうな!」

綾部「すいません!」

風間「冗談じゃない! 私が創りたいのはファンタ

ジーじゃないんだ! リアリズムなんだよ、くそリ

アリズムの映画を創りたいんだよ!」

蓋河「それじゃあ、若い子に受けないわ」

風間「出ました、常套文句が。君らのその若者迎合商

業主義がね、この国を滅ぼしたんだよ」

円山「監督、落ち着いて」

風間「いや、落ち着かない。私は嘗て落ち着いたことなどないんです。大体なんだ、恋愛場面を増やせとは。どうせ主演俳優の思いつきだろう」

蓋河、頷き、

蓋河「高田健二にも困っているの。『捜査は踊る！』

のヒットが自分の人気のせいだと思つての言いたい放題。しまいには、自分で監督したいなんて言い出しちゃうんだから」

風間「貴方たちが甘えさせているからだよ。大体、どうして海外ロケのとき、高田はビジネスクラスなのにアタシらはエコノミーなのよ。大阪ロケではなんで高田は梅田の日航ホテルなのに私たちは十三のウィークリーマンションなのよ」

蓋河「済んだことを何時までも。そういうの、女性に一番嫌われますよ」

風間「別に好かれないと思う女性も居ないんでね。大体、アイツはいつだって自分が楽しむことしか考えてない。なぜそこで闘わないの？ それがあなたの仕事でしよう!? アイツの事はまあいい。しかし何故我々が、こんな所でホン直しをしなければならなの!? いますぐ山城荘を取るんだ。出来ないのな

ら、私は帰る」

カバンを持って帰ろうとする風間を、円山が引き留める。

円山「短気は損気」

風間「だって、こんな屈辱は初めてじゃない」

円山「高田健二に監督の座を奪われても良いの?」

風間「フフフ、彼に監督となつて全ての作品的責任を負う度胸があると思いませんか? 主演俳優という隠れ蓑の後ろから、せこい注文をつけてくるのが関の山でしょう。(座つて) …見てくださいよ、この大きなカバン。私一人だけ、伊豆に行けると思つていたなんて、間抜け過ぎています」

綾部「…すいません」

風間「新しいデジカメまで買つてしまいました」

円山「恋愛に関しては、後からいくらでも付け足せる。(蓋河に向かって) あれでしょ? ヒロインが不治の病とかで死ねばいいんでしょ?」

蓋河「そうです。レイプ・妊娠・中絶。この辺りも外せませんね」

風間「ふざけるな! これは私の企画だ! そんな親指小説みたいな真似が出来るか!」

円山「冗談だよ。とにかく、今やる直しは、監督直しだ。監督がいなくては始まらない」

風間「…円山さん、そこまで(考えていてくれるとは)」

円山「否、映画作りの習い事です。」

風間、ガクツとなるが気を取り直して席に座りなおす。

と蓋河の助手の室井朋子が入ってくる。

室井「すいません、遅くなりました。」

風間「蓋河さん、こいつは連れてくるなど言つただろう」

蓋河「彼女は私の助手です。口出ししないで下さい」

室井「ちよつと、こいつとは何です! 連れてくるなつて何ですか? セクハラ、パワハラの両方で訴えますよ!」

風間「訴えたいのは私の方です。こんな映画は当たらない。風間重兵衛は過去の人間だ。私の居ないところで、随分と云つてくれているそうじゃないか」

室井「アラ、風間監督が居ないところで言つたのがお気に障つたのですら、ここで言いまししょうか?」

こんな企画は当たりません! 風間監督は過去の人間です!」

風間、倒れる。

綾部「ちよつと! 室井さん。いい加減にしてくれ!」

室井「あら、綾部さん、居らしてたんですか？ それならそうと早く教えてくれれば良いのに。蓋河さんの意地悪」

そこへ助監督見習い志望の坪井が来る。

坪井「綾部さんという方は？」

綾部「？ ああ、助監督見習い志望の坪井君。」

坪井「ええ、まあ。」

綾部「宜しくね。梅安さんとは家が近所なんだって？」

坪井「ええ、まあ。」

綾部「坪井君、風間監督だ。」

坪井「あ、どうも」

風間「『あ、どうも』？ …綾部、まさか、その、『ええ、まあ』しか言わない少年を助監督に就ける気なわけではないだろうな。」

綾部「いや見習いです、梅安さんの紹介なので。」

風間「ヤスさんの紹介？ 戦後最高の名助監督と謳われた梅安辰夫もこんな半端者を紹介するとは焼きが回ってしまったのか。それとも日本の若者事情が変化したのか。見習いでも助監督は助監督だ。先ず『宜しく』という台詞は綾部でなく、その坪井とやらが下に『お願いします』を付けて言うのが筋なのではないかね。それに自分の名前を訊かれて『ええ、ま

あ』とは何だ。私に向かって『あ、どうも』とはなんだ！ …ははあ、手前、差し詰め、ゆとり世代だな？ 綾部カメラ回せ！ ゆとり世代の実態を追ったドキュメンタリーを作って、制作費の足しにするぞ！」

綾部「はい」

蓋河「タイトルは？」

風間「モンスターゆとり世代」

坪井「十把一絡にゆとり世代と括られるのは心外です。」

風間「何を貴様ツ！ お前の返事は『はい』しかないはずだ！」

坪井「ここは軍隊ですか？」

風間「オウオウ、ボイススカウトも知らねえような兄ちゃんが聞いたようなことを言ってくれるじゃないの」

円山「笑って）そのくらいにして、ホンの話しを」

風間「怒らなければいけない時に怒らない、注意しなければいけない時に注意しない、その積み重ねが、このような自分のことしか考えないゆとり世代を、或いは室井のような女を、ひいては高田健二を生み出してしまった根源なんです。だから、責められるのはテラワキケンばかりではないはずですよ。見逃す

わけにいかんのです。」

坪井、携帯で風間の写真を撮り始める。

風間「…」

綾部「何してるの？」

坪井「ツイッターとLineやってるんで、写真撮らせてもらいました。あ、どうぞ続けてください」

ウェイトレス、コーヒーを持って入ってくる。

綾部「ここをどこだと思ってるんだ！」

風間「まあ、そう声を荒げなくてもいいじゃないか。君、当然、私の作品は全部観ているんだろう？」

坪井「いえ、観てません」

風間「何故観ていない!? そんな事で、私の助監督が務まると思うのか!？」

坪井「地元のTATSUYAに置いてなかったんで」

風間「なければ新宿でも渋谷でも行けばいいだろう！」

坪井「そこまでの必要性を感じませんでしたので」

風間、倒れる。

綾部「監督すみません、後で良く言って聞かせますので」

風間「言ってる聞かせる前に俺に会わせるな、こんな半端者を！」

蓋河「そうですね、ここ二時間しか取ってないんですから。早く始めましょうよ」

室井「延長は絶対に認めませんよ。」

風間「二時間しか取つてないとは、なんとまあ、ケチ臭い女たちだね。(突つ立っているウエイトレスに気づいて) ……何だ、どうかしたのか?」

ウエイトレス「あのおう、人数増えているようなんですけど。人数分、飲み物を注文して頂かないと。」

風間「大丈夫、あの人は直ぐに出て行くから」

室井「(立ち上がって) ロイヤル・ミルクテイ、ちょっとだいい!」

室井、出て行くところか忌々しく席に着く。

坪井「僕は、それにショートケーキを付けて下さい。」

嘩然とする一同。

風間「時間がないんだ、綾部、お前が進めていけ」

嬉しそうに拍手する室井。

綾部「僕がですか? ……はい、ええと…個人的には、馳一生を耐え忍ぶ人として描きながら、常に大衆に

喜ばれる事を第一としてきた馳一生の姿勢と言いま

すか、大衆性の強みというものを、もっと打ち出し

ていけば良いのかなと思ってるんですが」

風間「綾部、それって面白いのか?」

綾部「そう言われてしまいますと…」

円山「悪くないと思うけど、焦点が曖昧だよね」

風間「そう、焦点だよ。つまり物語の核だよ。それは

何か? あの顔斬り事件を置いて他にないだろう!

何故、被害者、馳一生は、役者の命である左頬を斬られたにも拘らず事件を不問に伏したのだろうか? 何故、馳一生は、事件を計画し実行させた法

螺プロデューサーの会社に5年後に所属したのだろうか? この馳一生のモチベーションがどうしても分からないんだ。何とかしたいんだ。」

円山「しかし、調べられるだけ調べたじゃないか」

蓋河「そうよ、あの調査で企画開発費使いすぎて伊豆がここになつたつてことをユメユメ忘れないように。」

風間「予算を抑えることしか考えていない何処かの女

性プロデューサーは兎も角として、円さんにはそう

いうことを言つて欲しくないね。俺は真相を解明し

たいわけではない、納得の行く、腑に落ちる、面白

い仮説を立てたい、それだけなんだ!」

円山「そうなの?! それだけなの?」

風間「何故、馳一生は事件を不問に伏したのか? 何

故、五年後に事件の黒幕・法螺プロデューサーの事

務所と専属契約を結んだのか? この二つの謎に、

テーマに沿つて納得の行くインタレスティングな結

論を出さないと単なる馳一生のプロモーションフィルムで終わつてしまうんだヨ!? 事実が詰まらな

かつたら、事実には拘らなくても良いの、面白い仮説を立てられれば。分かるか綾部!」

綾部「勿論、分かりますッ。でも、監督はくそリアリズムの作品を作りたいんですよね?」

風間「綾部、お前は映画のことが何も分かつていない! リアリズムのことが何も分かつていない!

いいか映画はリアリズムが基本だがリアリズムだけ

が映画じゃないんだ。リアリティにリアリティを積

み重ねていくことに腐心して、そのリアリティを踏

み台にシユールの世界に飛翔するんだ! その瞬間、映画は映画に成るんだ!! 分かるか綾部!」

綾部「…はい。」

蓋河「冗談じゃないわ! 冗談じゃありません、そんな訳の分からないことは自主映画でやって!」

風間「ほう、自主映画でね。蓋河プロデューサーにお

尋ねますが、自主映画でない映画って世の中に存

在するんですか? 映画って誰かがやりたいと思う

ところから始まるわけでしょう? だったら全ての

映画って自主映画ではないのですか? その伝で行

けばこの『貌斬り』も私がやりたい、つて思った訳

ですから当然、自主映画な訳ですよ? それと

も、誰一人としてやりたいと思う人が居なくても出

来てしまう映画が蓋河プロデューサーの周りでは存

在しているということですか？もしかして。」

蓋河「言葉を間違えたよね。自主映画ではなくて自主制作でやって下さい、難しいことは。自分で全部金出してね。」

風間「ゲブラー！ゲブラー！ゲブラプロデューサー！！あなたいつからそんなプロデューサーに成り下がった？『私たちは所謂（映画）を作っている訳ではない』あの言葉には衝撃を受けましたよ。じゃあ一体あなたは何を作ってるわけ？でっかいテレビドラマ？それとも、誰一人としてやりたいと思っている人が居なくても出来てしまう映画？だとするとこの場にいる資格はない！」

室井「また、済んだ事をネチネチと。もうその事はいいじゃないですか。皆さんに散々、叱られたんですから。ねえ。」

坪井「（綾部にボソツと）…馳一生って誰ですか？

事件でどういう事件なんです？」

風間のみならず円山、蓋河も坪井を見る。

蓋河「ほらあ、やつぱり！若い子は知らないのよ」

室井「馳一生のファンなんて、みんなとつくに死んでますからね。全国400館じゃなく、あの世で公開しなきゃ、採算取れませんよ」

円山「言うねえー 最高のヒールだね、室井君は！！」

室井「女性社会とは名ばかりの男性社会ニッポンで

日々、精進させて貰っていますのでッ」

風間「私の周りの若いものはみんな馳一生を知っていた！」

坪井「原作は何という漫画ですか？」

風間「綾部、こいつを抛り出せ！私が漫画なんぞを

原作に映画を作るか！」

蓋河「…若い観客層に受けられないようだと、製作費を更に減らさない」と

室井「いつそ舞台にしちゃえば？予算ぐーっと減らして」

風間「もつと建設的な意見を言えないのか？知らない

いから受けないと、なぜ決めつけるんだ。我々には先人達の偉業を伝えていく義務がある。知らないなら教えてやるべきだろう！」

蓋河「そうかもしれないけど」

風間「（坪井に）知らないの？馳一生を知らないの？

戦後映画界を席卷した天下の二枚目、馳一生を知らないの？その馳一生が所属プロダクションを

『竹梅』から『蓬萊』に移籍した直後に暴漢に襲われて左頬を十五cmも斬られた事件、知らないの？」

坪井「全然」

円山「本当に知らないの?! あまりの反響にセンター

試験に三回も出題されたほどののに。それを本当に知らないの?!」

坪井「指定校推薦で大学入ったもので」

綾部「馬鹿！今のは笑うとこだろう」

円山「俺、来週から『しゃべくり007』の構成降りるわ。」

ウエイトレス「（ロイヤル・ミルクティとショート

ケーキを持ってき）戦後の日本映画界、特に時代劇俳優として第一線を走り続け、昭和三十年十一月十

二日に移籍問題から暴漢に襲われ左頬に疵を負った上方歌舞伎界出身の大スターは誰か？次の中から

選びなさい。①中村錦之助②市川雷蔵③高倉健。④

馳一生」

一堂、何事が起きたかとウエイトレスを凝視している。

ウエイトレス「映画好きの私の祖母は、馳一生の映画を観る日になると、まるで恋人に会いに行くかのよう

に決まって化粧に時間をかけ、映画館に出かけたと母から聞いてきました。顔斬り事件のことも祖母

から耳にタコが出来るほど聞かされて育ってきました」

風間「ほほう。見ろ！こういう若い世代だつて居る

んだ！（ウエイトレスに歩み寄り）珈琲もう一杯」

蓋河「新聞、テレビ、ラジオ、ニュース映画でも大きく取り扱われ、当然、背後には『竹梅』の恨みがある」とされたが、一生はことを大きくしないように警察に頼み込み事件の真相を闇に葬ったと言われている戦後最大の芸能スキャンダル。」

坪井「それって安藤昇の間違いですよ？」

風間「莫迦！ トウシロウ、無知蒙昧！ 天下の二枚目馳一生の方が全然有名なのに云っているの。」

円山「しかし、何故、安藤昇のことは知っているわけ？」

坪井「お言葉ですが」

風間「お言葉なんだよ、ゆとり野郎！」

蓋河「（風間と一緒に）お言葉なのよ、ゆとり野郎！」

坪井「若者が無知であるのは、ある程度当然の事だと思えます。生まれてからの時間が短い訳ですから。」

それに興味の持ち方も違うのですから。例えばみなさんは、ブルーノ・マーズを知っていますか？」

円山「いや。それよりどうして安藤昇を知っている訳？」

坪井「アークティック・モンキーズは？ ニッキー・ミナージュ、アリアナ・グランデはどうですか？」

「ご存じない？」

風間「……」

坪井「すべて二〇一五年の現代で若者に絶大な支持を受けているアーティスト達です。ホラ、みなさんだつて、若者達と同様に無知なんです。まずはその事を自覚するところから始めるべきでしょう。そもそも……」

綾部「もういいって！ 分かったから！」

風間「（いじけて）……綾部、私は今、説教をされたのか？」

綾部「監督気にしないで下さい」

坪井「説教ではありません。一つの提案です」

綾部「もういいって！ 監督の心を折りに行くな！」

円山「監督、今回はミュージシャンなんて関係ないじゃないですか。気を取り直して、進めましょうよ」

風間「……前から気になっていたんだが、なんでミュージシャンだけがアーティストって呼ばれるわけ？」

円山「只の習いでしょ。若者のやっていることに大した意味はないんだから。ホラ、綾部君。何か意見無いの？」

室井、綾部に拍手する。

ウエイトレス「あのう、映画業界の方ですよ？」

綾部「そうだけど、何か？」

ウエイトレス、恥ずかしそうに走り去る。

室井、再び拍手する。

綾部「（円山に）負い目だと思えます。何か『竹梅』や法螺プロデューサーたちに対して負い目があったんですよ。」

風間「それはそうだろうよ、負い目があるから事件を闇に葬り、法螺の会社にも入ったんだろ。その負い目とは、具体的にどういう負い目よ。」

綾部「それはそのう……」

風間「やはり、お前は映画が何も分かっていない！

映画は具体が必要な表現芸術なんだ！」

坪井「皆さんのお仕事って面白そうですね。」

室井「入りたかったら、電話番号からやってみようよ」

坪井「どうして僕が電話番号をやらなければならないんですか？」

蓋河「『どうして、僕が、それをやらなければならないんですか？』まさに、ゆとり世代の代表的なフレーズね。しかし、それなら私が、君にギャラを払うことになるプロデューサーの私が、やれば良いっていうの？」

坪井「……僕、嫌われたみたいなので。帰ります。」

風間・円山・綾部・蓋河・室井「（声を揃えて）お疲れ様でした」

綾部、出て行くこうとする坪井を引き留める。

綾部「冗談だって、まあ、待つて」

蓋河「冗談じゃないわよ！ 何でもかんでも冗談で済ませないのッ。」

風間「同感だ」

ウエイトレス「(戻って来て) あもう、私、電話番号でも何でもやりますから是非、仲間に入れて下さい。

馳一生さんのことを映画にするなんてそれだけで素敵！ きつとお祖母ちゃんの引き合わせです。」

風間「お嬢さん、それは出来ません。先ずは現在のあ

なたの仕事、ウエイトレスを全うするのに全精力を捧げるのが人間としての在るべき姿です。その仕事を途中で投げ出すことは下品です。私は下品な人と仕事をしたくはない」

蓋河「私もよ」

ウエイトレス「…分かりました。でも、諦めません！

必ず皆様の仲間に入れてもらって女優になってみ

せます！」

一同「女優!？」

円山「色々と予期せぬ邪魔が入るけど、ロールプレイでやってみれば、久々に。」

風間「ロールプレイ!? …お言葉を返すようですが、

ロールプレイは危険過ぎます」

円山「どうしてよ?」

風間「アレを経験した者の殆どは演じることに魅せら

れて俳優に転向してしまうのです。」

円山「それで昔の助監督が全然、居ないのか!？」

風間「(遠くを見て) 佐藤は、東映太秦撮影所の大部

屋で斬られ役に。横山は、民芸で宇野重吉先生の付き人に。そして森本は、ハリウッドでステイブ・

マックイーンのスタンディンをやっています」

円山・蓋河「いつの時代の話よッ。」

綾部「なんですかロールプレイって?」

円山「文字通りロールプレイさ。ここにいる我々が演技者として馳一生、法螺仁、実行犯になって事件前後を再現してみるってわけよ。彼らに成りきることが当時の彼らの感情や考えなどが解かることがある。」

室井「まさかッ、何言っているの、バツカじゃない

の!」

円山「ヒールなりアクションだね。私も最初は眉唾

だったが、風間監督は、昔、ドライブの途中、黒澤

明監督に成り切って、黒澤監督の御殿場の別荘の場所を見つけたほどだ。」

風間「(黒澤明風に) 一点一画を丹念に描くことによっ

て、そこから飛躍したものが生まれる」

蓋河「それ以来、黒澤明から戻れず、精神だけは巨匠

のまま今日まで来ているんですよね。」

いつの間にか黒澤明ばりのサンングラスをかけて

いた風間、傷つき綾部に凭れる。

思わずドギマギしてしまふ綾部。

蓋河、携帯が鳴り、席を立つ。

蓋河「そう、分かった。私もその位には戻るから、も

う少し調べてみて」

蓋河、溜息をついて席に戻る。

室井「どうしたの?」

蓋河「決まりかけていた、この作品のスポンサーがバタバタ降りるもんだから、おかしいと思って、調べさせたの。どこから聞きつけたのか、どうも、どこの団体が圧力をかけてきているみたい。怪文書や脅迫状がスポンサーに出回ってるって。この企画を潰さない為にも、やっぱり恋愛色を強めるという方向でいきましょう、ね!」

風間「何言ってるの? 脅迫状なんて、日常茶飯事

だ。いちいち気にして映画が作れるか。よしッ、こ

うなれば多少の犠牲には目を瞑るしかない。ロールプレイを行うか、久々に!」

蓋河「だめよ。何かタブーがあるんです、この企画に

は。恋愛の線をお願いします。」

室井「いっそ、中止にすればいいんです!」

風間「いいじゃないの、タブー、ドンと来いですよ。」

さあ、ロールプレイ始めましょうか」

蓋河「時間の無駄ですッ、そんなもん！ 駄目、絶対に認めない。何がロールプレイよ」

綾部「僕も演技することに魅せられて、俳優に転向するのでしょうか？」

風間「自惚れるのは、ロールプレイを体験してからにしてくださいませ」

室井「いいじゃない、好きにやってみれば。それで企画が潰れるんなら、手間が省けるし」

蓋河「朋子あんたね」

室井「蓋ちゃんおかしいよ。企画の主旨曲げて、役者の我がまま聞いて、そのままですってこの企画通す必要がどこにあるの？ 売れる映画が良い映画なんじゃないよ。なんでこの作品にそんなに拘るのよ？」

蓋河「それは、良い映画になると思うからよ」

室井「良い映画？ どうかしてるわ。私の父親が、良い映画を作り続け、六億の赤字を出して憤死したのを忘れたの？ 確かにその志は美しいかもしれない。でもね蓋ちゃん、これは、ビジネスなのよ」

蓋河「分かってる。だけど、ビジネスだけなら映画はやっていないわ」

室井「やっぱね。でも今の日本人に良い映画は必要

ないの。猫に小判なの。それに、全盛期を過ぎた今の風間監督には良い映画は作れない。そんなこと蓋ちゃんのほうが分かっているはずじゃない！」

風間、またしても倒れる。

蓋河「勝手に私の事を決めないで。そんな事思ってもいないわ」

室井「…そう、でもこの映画、どうやって宣伝するつもりなの？ 高田健二は『踊る』シリーズしか当たらないのよ。風間監督は話題だけ先行して、ヒット

作品は一本もないのよ。脇役でもいいから、シャニーズが本吉使わなきゃ話にならないでしょ」

風間「そんな話は会社でやってくれ。ここは脚本作りの現場なんだ！」

室井「これはこの作品についての重要な話なんです。現場の人間は黙っててください」

風間「…良く聴こえなかった。もう一度言ってもらおうか！」

綾部、風間を制して立ち上がる。

綾部「映画は会議室で作ってるんじゃない。現場で作ってるんだ！」

室井「…綾部さん？」

綾部「一回言ってみたかったです。今しかないって

思いました」

坪井、立ち上がる。

坪井「室井さん聞こえるか？ …どうして現場に血が流れるんだ！」

綾部「おう、いいねえ坪井」

室井「聞こえてるわよ、血のりでしょ」

風間「お前らすっかり『踊る』ファンじゃねえか」

綾部「一応、TVドラマの第一シリーズからDVDは全て揃えています。」

室井「(坪井に) 坊や、良く聞きなさい。映画は現場で作ってるんじゃないの。会議室で作ってるの。お金を集めなければ映画は作れないの」

綾部「くーっ！ たまんねえ！」

円山「何なの君ら？」

室井「ホントよ、綾部さんまで」

綾部「反省してます」

すると、蓋河の携帯が鳴る。

露骨にブーイングする風間。

蓋河「もしもし…はい、え…今からですか？ …いえ、伺わせて頂きます…はい、宜しくお願います…失礼します」

室井「どうしたのよ？」

蓋河「例の企画、どうしても今日、監督が主演女優と

打合せしたいって。悪いんだけど、朋子行ってくれない？」

室井「嘘でしょ？ こっちの方が大事だっていう訳？」

蓋河「上司の命令よ」

風間「上司の言葉には素直に従ったらどうなんだ」

室井「お言葉を返すようですが。どう考えたって、逆でしょ。私が残って、あなたが行くべき打合せよ。何だったら、二人とも向こうに行ってもいい位だわ。それ程大事な仕事でしょ！ 蓋ちゃん、アンタ何考えてんの？」

蓋河「企画は複数、身体は一つ。貴女は私の有能な助手。任せても不思議じゃないはずよ。」

室井「分かりました。その代わり、私がメインでやってもいいと云うことね」

蓋河「自信があるなら任せても良いわよ。」

室井「Don't you have confidence? Well, I have. (綾部に) ジュテーム」

室井、風間には挨拶もせず出て行く。

円山「良いヒールだよ。でも、いいの？ 蓋河さん」

蓋河「いいんです。それより脚本直しです。ロールプレーとかじゃなく、もっと正攻法で脚本直しに取り組みましようよ」

風間「考えてみれば、これが私の正攻法な脚本直しのアプローチなんだ。これで駄目なら諦めて恋愛要素を増やすことを考えよう。」

蓋河「武士に二言は、ありませんね？」

風間「私は武士ではないが、監督に二言は、ないッ。」

「蓬萊」移籍までの少なくとも一年間の客観的個人史を前提として、斬られる前後の馳一生の一挙手一

投足、目の動かし方、息の吐き方。実行犯の表情、身のこなし方。そして駆けつけた法螺プロデューサーの様子。彼らに成り切って、そこからユニーク

で万人の興味を惹く仮説を導き出すのだ！ それが出来るかどうかで映画の出来が決まるんだ！

蓋河「出来なければ、恋愛映画にシフトチェンジ」

風間「…よし、やるぞ！」

円山「やるって一体どの場面を？」

綾部「そりゃ、顔を斬られるところじゃないんですか？」

風間「まあいい、やってみれば判る。馳は綾部、円さんは実行犯をやってもらおう。ヨイ、はい」

源義経の衣裳を着た馳一生役の綾部が付き人を従えて歩いている。

風間「時は昭和三十年十一月の夜、場所は京都は太秦の丁O撮影所付近の林に囲まれた小道。」

背後の声「馳一生さんですね？」

の声に振り向きなり一閃！ 左頬を剃刀のようなもので斬られる馳一生。

そのまま逃げる実行犯役の円山。

駆けつけた法螺役の風間。

☆ ☆ ☆

風間「カット！ なんだ、今の芝居は!? 演技に魅せられて俳優に転向？ 笑わせるな。ドサ回りだつて

雇っちゃくれないだろうよ、その芝居じゃ」

綾部「…すいません。しかし…」

風間「しかし、カカシもないんだよ。お前には感情が無いのか!？」

綾部「いえ、あります」

風間「想像力が無いのか!？」

綾部「あります」

風間「だったら出来るだろう！ もう一回！」

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

源義経の衣裳を着た馳一生役の綾部が付き人を従えて歩いている。

風間のナレーション「時は昭和三十年十一月の夜、場所が京都は太秦の丁O撮影所付近の林に囲まれた小道。」

背後の声「馳一生さんですね？」

の声に振り向きなり一閃！左頬を剃刀のよう

なもので斬られる馳一生。

そのまま逃げる実行犯役の円山。

駆けつけた法螺役の風間。

☆ ☆ ☆

風間「カット！……さて、今の演技で何か新しい仮説が閃きましたでしょうか？」

会心の顔をしていない二人。

二人「……」

風間「閃く訳ないよな。そもそも選ぶ場面が違うんだよ。顔斬りに至るまでが肝心なんだから、行き成り、この場面やったって仕方ないだろう」

綾部「……すいません」

風間「それに、芝居がまだまだだっていないよ二人とも。いいですか、先ず、当時の馳一生と実行犯・朴

の置かれた状況をあなた達は中核のスタッフとして

熟知しているわけだ。脚本家とチーフ助監督が熟知

していないとは言わせませんよ。その役の状況を演

じる者が自分自身のものとして、つまり、あなた方

一人一人のことと認識し私だったらこうすると云う

ことで行動しなければ、演技とは言えないんだよ。

特に馳役の綾部、いつまでも助監督じゃないんだろ

う？ そんな事では役者に芝居はつけられんぞ」

綾部「聞いてましたんですか？」

坪井「ああ、ロールプレーってつまり、スタニスラフ

スキー・システムのことですね。」

全員「!?」

綾部「スタニスラフスキー？ なに、それ？」

坪井「スタニスラフスキーです。ロシアの有名な舞台

演出家だった人です。舞台俳優でもありませんが。

彼の『俳優修行』という本の中で書いている俳優の

役の演じ方です。」

全員「おお!」

坪井「アメリカのアクターズ・スタジオでは、スタニスラフスキーシステムを基にメソッドを開発し、

マーロン・ブランド、ジェームス・ディーンらは、

メソッド開発者の一人と言われているエリア・カザン監督の作品で、演技を確立したと言われている

す」

綾部「私は何も知らなかった!」

坪井「簡単に言うと自分の演じる役、馳一生だったら

馳一生を徹底的にリサーチし、彼の置かれていた状

況や感情を、演じる者が自分自身の人生と重ねあわ

せ、理解、認識した上で、演技してみる。そのこと

において自然な芝居を導き出すと云う理論です。」

全員「おお!!」

坪井「演技演出に携わる者なら、最低限の常識かと思

います」

綾部「一言多いんだよ」

坪井「スタニスラフスキー・システムをシナリオ作り

に応用するという発想は面白いですが、馳一生の配

役が違うのではないのでしょうか」

風間「挑発する若者は嫌いではないが、思考の邪魔を

する者は嫌いだ。それともロールプレーに参加した

いというサインなのか？ ゆとり世代独特の。だ

とすると馳一生や顔斬り事件のことを知りもしない

君に務まるほど甘いものではないんだ！ そんなこ

とはスタニスラフスキーさんを持ち出すまでもなく

判るはずだ。綾部、馳一生が蓬萊に移籍したのはいつだ？」

綾部、手元のノートを広げる。

綾部「えー、新聞に発表されたのは、昭和三十年十月十三日です」

風間「顔を斬られたのは？」

綾部「二月後の十一月十二日です」

風間「移籍発表の前日は何をしていた？」

綾部「『人情皿屋敷』の撮影で、三重に行ってます」

風間「その前日は？」

綾部「撮影所で撮影をした後、自宅で麻雀をしています。」

風間「面子は？」

綾部「確かではありませんが、いつもの面子だったでしょうから、馳一生・法螺プロデューサー・円山さんの師匠の川口先生・あと馳一生の奥さんのかよ子です」

風間「奥さんもいたの？」

綾部「はい、夫婦で麻雀好きだったようで」

風間「そうか、奥さんと法螺は知り合いだったわけだ」

綾部「そうですね」

風間「…とすると」

風間、考え込む。

風間「…奥さんは、当然、馳が移籍しようとしていることに気づいていたはずだ」

円山「上方歌舞伎の大御所である父の雁九郎はじめ、一族全てが竹梅の人間であるかよ子に、蓬萊への移籍など許せる筈が無い！」

綾部「それで？」

風間「どんな手を使つても、一生の移籍を止めさせようとしたかも知れない。」

蓋河「思わず身を乗り出してしまい）そこで、百本組と付き合いのある、法螺に頼んだ。少々荒っぽいやり方でも構わないと！」

風間、そんな蓋河をニヤツと笑う。

円山「歌舞伎界なら、あつてもおかしくない」

綾部「妻が夫を、ですか?！」

円山「個人より御家の方が大切な封建社会の亡霊なのさ」

風間「よし、奥さんから依頼を受けた法螺が一生に会いに来る、そこをやってみるぞ！ 馳役は引き続き綾部、法螺役は円山にやってもらおう。いくよ、よい、ハイっ！」

役作りの瞑想に入っている綾部と円山。

やがて立ち上がり、

法螺役の円山、立っている。

馳役の綾部、やってくる。

法螺（円山）「悪いな撮影中に」

馳（綾部）「いえ、あとは細かいシーンが残ってるだけですから」

法螺「そうか、無事クランクアップして、竹梅とはおさらばって訳か」

馳「…何の話です？」

法螺「惚けるなつて。蓬萊に移籍するんだろ？ 手付金まで貰ったつて聞いたぜ。悪いことは言わない、止めときな」

馳「…」

法螺「息子の初舞台の費用を巡って、会社と揉めたからか？」

馳「費用の心配はいらないと言ってくれていたのに、突然金を返せと言われたことはありませんが」

法螺「所詮役者なんて、会社からしてみりゃ金儲けの道具に過ぎないんだよ」

馳「そこまで分かっている、何故止めるのです？」

法螺「それが筋だからよ。俺も竹梅には随分世話に

☆ ☆ ☆

なってる。お前だつてそうだ。今まで受けた恩を仇で返して、この世界で生きていけると思ってるのか？ 人として正しいと思ってるのか？」

馳「恥欠く、義理欠く、人情欠くの竹梅に、そんなことを言われる筋合いはありません。」

法螺「もしも移籍してみろ。何が起るかわからないぞ」

馳「顔でも斬るつもりですか？」

法螺「そりゃあ名案だ。天下の二枚目馳一生の顔だ。

疵を付けてやりたいと思ってる奴は、腐るほどいるだろうぜ」

法螺、笑いながら去って行く。

馳「……」

☆ ☆ ☆

風間「カット！ うーん、イマイチだな」

円山「移籍させないための脅しなんだから、実際に移籍しなかったら、その後顔斬っても仕方ないんじゃないかな」

風間「そこは法螺の面子で事で、イケると思っただけどねえ。円さんの法螺の捉え方も違うんだよな」

綾部「でも、妻・かよ子の依頼でだけじゃ、今ひとつ弱いような」

円山「やっぱり法螺の個人的な動機が必要なんじゃない？」

風間「確かに……一生の負い目も見えてこないしなあ」

円山「そうですねえ……」

風間「この仮説じゃないって事だ。もつと核心に迫る仮説じゃないといけないって事だ」

一同、考え込む。

風間「事件の前日はどうだ？ 何をしていたんだ？」

綾部「その日は蓬莱の撮影所で衣装合わせをした後、午後には自宅に帰ってます」

風間「まっすぐ家に帰ったのか？」

綾部「えー、うどん屋に寄ってますね」

風間「あー、あのうどん屋か」

円山「え、何それ？」

風間「馳のいきつけのうどん屋があるっていうから、綾部と一緒に行ったんですよ」

円山「どうして誘ってくれないの？」

風間「だって円さん二日酔いで、それどころじゃなかったでしょう」

円山「どうしてそんな大事なことを、黙ってたのよ」

綾部「そんなにうどん食べたかったんですか？」

円山「違うよ、実行犯とされている朴成漢にも行きつけのうどん屋があったんだよ！」

風間「まさか……」

円山「綾部君、その店の名前分かる？」

綾部「ちよつと待ってくださいね」

綾部、ノートを慌しくめくる。

円山、自分のノートをめくる。

綾部「あ、あった」

円山・綾部「(声を合わせて) 久兵衛！」

風間「なんと！」

一同、手を叩いて喜ぶ。

円山「馳と実行犯には接点があったんだよ。二人はう」

どん屋で遇ってたんだ」

蓋河「けど朴成漢は、身代わりの可能性が高いので」

しょう？」

風間「身代わりでも、面白ければ真犯人にしちゃう」

の。それが魅力的な仮説ならば。よし、うどん屋に」

場面を移してロールプレイだ。果たして二人の間に」

何があったのか!? 馳は綾部、朴は坪井、お前やってみろ。店員は私がやる。」

坪井「ハ?! 僕には演じる資格のようなものがないのではなかったのですか？ 第一、僕がどうして俳優」

の真似事をしなくてはならないのですか？」

風間「つべこべ能書きを垂れるな！それが助監督の

習いだ！ ついでに言っておくが朝令暮改は監督の習いだ！」

坪井「習い習いなどと、まるで官僚ですね。思考停止も甚だしい」

綾部「馬鹿！ お前はホントに黙っててくれよ」

風間「監督に向かって、思考停止状態とは、大した度胸だ。そこまで言うなら、教えてやろう。スタニスラフスキーさんとやらが何て言っているかは知らないが、演技とは、他人を演じるとは、ある種のインテリジェンスと想像力を拠る所とするものなのだ。知性と想像力こそ人間の証だ。犬や猿には、いやスパーク・コンピューターにだって芝居は出来ない。つまり、演技とは極めて人間的な作業なんだ。そこに役者もスタッフもない。我演じる、故に我あり、分かったか！」

坪井「……まあ、理屈としては。でも、もっと詳しいマニュアルを下さい」

風間「マニュアル!? 思ったとおり、正真正銘のゆとり世代だ。残念だったな。ここにはマニュアルもなければ、優しい教官もない。体で覚えるんだな」
ウエイトレス「(再度登場) 女が男の役をやっているではないのでしょうか？ やる気のないそのゆとり野郎より、溢れるばかりの情熱を持ち、馳一生の事も熟知している女優志願の私にチャンスを一」

ウエイトレス、土下座する。

風間「綾部！ さっき説明した通りだ！ お引取り願え！」

綾部「はい」

綾部、ウエイトレスの体を起こそうとする。

ウエイトレス「(綾部に) 下手クソ！ (坪井に) 鼻クソ！」

ウエイトレス、泣いて袖へ。

風間「ドキュメンタリーのタイトルは、『鼻クソゆとり野郎』に変更だ。」

蓋河「行けてるわ！」

風間「よし、いくぞ、よーい、ハイ！」

☆ ☆ ☆

瞑想し、役作りに没入している綾部と坪井。やがて立ち上がり、

実行犯、朴役の坪井、うどんを食べている。

馳「今日は。おばちゃん、いつものお願い」

店員(風間)「はい、いつもありがとうございます」

馳、朴とすれ違う。

お互い目が合い、朴、軽く頭を下げる。馳、微笑んで会釈した後、離れた席につく。

うどんをすすり続ける朴。置いてあった新聞を読み始める馳。

馳「……」

朴「……」

☆ ☆ ☆

風間「カット、カット！ 何も起こらないじゃないの！」

綾部「うどん屋ですから……」

円山「確かに、馳一生がうどん屋で、他の客と話す方がおかしいか」

坪井「朴にしても、馳に声をかけるのは難しいですよ」

綾部「うどん屋ですからね……」

風間「だから！ そこを事件に結びつくように工夫して演じるのが、あなた方の仕事でしょう!? 大体なんでしょうか、うどん屋うどん屋って。うどん屋で、顔斬ろうと思っちゃいけないんですか？ うどん屋で、恨み持ったらいけないんですか？ うどんを食べる間は、みんな平和主義ですか？ うどんに事件

性はないって言うんですか？ うどん、ナメんなよ！

綾部「…はい」

風間「綾部、もう一回だ！ ちゃんと考えてやれ。坪

井、朴は馳の大ファンなんだ、在日なんだ。その二

つのキーワードで想像力を喚起しろ！ いいか、

我々の武器は想像力ただ一つだ！

綾部「はい！」

坪井「…はい」

☆ ☆ ☆

実行犯・朴役の坪井、座っている。

馳役の綾部、入ってくる。

馳（綾部）「今日は」

店員（風間）「あら先生。すいません、相席になって

も宜しいですか？」

馳「ええ、構いませんよ」

店員、朴のもとにきて。

店員「すいません、混み合ってますので、相席でも宜

しいですか？」

朴「ええ、どうぞ」

店員「さ、先生どうぞ」

馳「ありがとう、いつものお願いします」

馳、朴の前に座る。

店員「（朴に）はい、素うどん、お待ち」

朴、素うどんをすすり始める。

店員、馳のうどんを持ってくる。

天ぶらうどんだ。

店員「お待たせしました。天ぶらうどんです。」

朴「…天ぶらうどん！」

馳、天ぶらうどんを食べ始める。

馳「…」

朴「…」

馳「…」

朴「…くそ、顔斬ってやる！」

☆ ☆ ☆

風間「（坪井の頭を叩く）天ぶらうどんで顔を斬ろう

と思うか？ お前は馳の大ファンなんだ。おかし

だろ！」

坪井「でも、こっちは素うどんだし。強引にでも、持っ

ていかなきゃと思ひまして」

風間「強引過ぎるよ。どうやらスタニスラフスキー・

システムも口先だけらしいな」

坪井「…まさか演じる方に回るとは思っていないんでしたので」

風間「フッフ、マニュアルで育ったゆとり世代の特徴

だ。想像力が欠如している。肝心なのは、一生の負

い目と斬りつけたいと思うほどの強い恨みを引っ張

り出すことだ。いいな。よいい、ハイ！」

☆ ☆ ☆

実行犯・朴役の坪井、注文している。

朴「いつもの」

店員（風間）「へい、素うどん、二丁！」

馳役の綾部、入ってくる。

馳「今日は」

店員「あら先生」

馳「いつものお願いね」

店員「いつもありがとうございます。天ぶらうどん。」

馳、朴と離れた席に座る。

目で挨拶しあう二人。

店員、馳のうどんを先に持ってくる。

朴「？」

店員「お待たせいたしました。天ぶらうどんです。」

馳「ありがとう」

馳、うどんを食べ始める。

朴「…」

朴、じっと待っている。

朴「……こそ、顔斬つてやる！」

☆ ☆ ☆

風間「(坪井の頭を叩いて) みみっちいんだよ！」

坪井「この野郎！ 俺のほうに頼んだじゃねえ

か！ それを先に食いやがって！」

坪井、綾部につかみかかろうとする。

風間「(坪井を抑えて) やめろ！ ゆとり世代同士の

喧嘩じゃないんだぞ！」

綾部「けど、確かに負い目は感じました」

風間「いいんだよ、感じなくて！ 天下の大スターな

の。先に食べてもいいの！ (坪井に) 責められる

なら店の方だろう。もう一度その時の朴の感情を丁

寧に追っていつてみる。」

坪井「…チクシヨウ、どうして天ぶら揚げる手間もな

い素うどんの方が遅いんだよ！ 明らかに嫌がらせ

だ！」

風間「ほら、お前が腹を立てる相手は馳一生ではなく

て、店のほうなんだよ。馳には向かないの。本末転

倒つて云うの、そういうの」

坪井「(混乱して) 大スターなら何やつても許される

のか！」

坪井、再び綾部につかみかかろうとするが、円

山に取り押さえられる。

風間「今、何て言った？」

綾部「確か、大スターなら何やつても許されるの

か？」

風間「フーン、中々、良い台詞だね。この場面はもう

いいよ。みんな席について」

坪井「(呟く)…俺のが先だったのに」

綾部「君、役に成り切る才能はあるね。」

一同、席に着く。

円山「やっぱり駄目か、うどん屋じゃ」

綾部「うどん屋ですからね」

風間「否、そんなことはない。恨みの種が、うどんが

来る順番や天ぶらうどんでなかったら？」

円山「そうか！」

風間「うどんの順番であれだけ逆上する朴がもし、違

うことで恨みを持ったら？」

蓋河「ねえ、何の話してるの？ 早く進めましょ

よ。後、一時間ですからね！」

風間「自腹でお代りすればいいんだろう。」

綾部「監督！ やっぱり、実行犯の朴は単なる身代わ

りだったという方が、良いんじゃないですかね」

風間「まあその方が、犯人像は自由に出来るわな。坪

井。お前も何かないのか？」

坪井「はあ」

風間「はあ、じゃないだろう。何か意見はないのか助

監督見習いとして？」

坪井「じゃあ…」

風間「何だ、あるんじゃないか」

坪井「帰っていいですか？ 観たい番組があるんで」

一同、倒れる。

風間などは不貞腐つてソファに後ろ向きに横に

なつてしまう。

綾部「分かった。いいよ帰つて。その代わり、二度と

我々の前には現れないでくれ。」

坪井「はい、ハリウッドに渡りジェームズ・カメラ

ンに弟子入りし3Dを学びます。」

風間「こうしていても仕方ない。もう一度基本に戻つ

て、顔斬りの場面をロールプレイしてみるか」

坪井、出て行こうとすると、そこへ映画評論家

の竹脇穰が入ってくる。

竹脇「良かった、間に合ったようだ。」

蓋河「これは竹脇先生ご無沙汰しています。昨年は私

どもが製作した『過疎村の偽医者』を朝日紙上他で酷評して頂き、話題作りに拍車をかけて下さり感謝しております。」

竹脇「エエ？ あんなリアリティのないお子ちゃま映画を作る人たちの顔が見たいと思っていました、こんな身近に居たのですか。」

蓋河「ははは、相変わらずお厳しいこと。確かに医師の免状を持っていることを確認しないで年間二千万円の報酬で偽医者を雇うことは、幾ら過疎村でもあり得ないことなのは百も承知しました。しかも携帯の通じる村で。全くのリアリティの欠如です。でも、今時の批評家にはそこまで見抜けないと高を括ったのです。しかし、流石に竹脇先生には見破られましたわ。」

竹脇「当たり前です、私をそこいらのお子ちゃま批評家と一緒にしないで下さい。」

蓋河「その『過疎村の偽医者』でシネマ月報の脚本賞を受けた円山宗一郎先生を紹介しておきます。」

円山「：お子ちゃま脚本家の円山です。」

竹脇「不味い所に来てしまったようですね。監督、御待ちかねの人物の登場ですよ。」

風間「？ と言いますとー！」

竹脇「綾部君ッ、花道はどこだ！ 無ければ作ってく

れ！」

華麗なる音楽と共に、観客席にスポットライトが当たり杖を突いた老人・馳一生が徐に現れる。

風間「老人を凝視して」おお！ 馳先生!? 馳一生先生!!

年老いてはいるが、そこは元天下の二枚目、あらゆる種のオーラを放ちながら綾部と竹脇のナビにより席に座る。

円山「馳先生！ お久しぶりでございます。脚本家の円山でございます。先生の代表作『男の花道』の時に川口先生の助手をしていたあの円山宗一郎です。」

馳「ああ、覚えている。覚えている。確か清書係りをしていましたね。」

円山「あれは兄弟子の菊島忍です。いや、それにしてもお若い。ご壮健でなによりです」

馳、突然糸が切れた様に崩れる。
一同、馳の体を支え、椅子に座らせる。

竹脇「3分間しかもたないんだ。無理をし過ぎてしまった」

円山「私は、川口先生に原稿用紙を差し出す役目を仰せつかっております、あの円山でございます。い

や、そんなことより、どうして、ここへ？」

馳「今度、私が主演する映画に文句を言いに来ました。：映画は夢です、ロマンです、ファンタジーです。

夢のあるストーリー、豪華な出演者、素晴らしい衣装とロケーション、そして華麗な音楽…。私が主演する以上、これらの要素は不可欠なのです！ 特に相手役は大切です。小百合ちゃんか山本富士子君にしてもらわないとね。」

狐に摘まれたようになる一同。

竹脇「(一同に) 違うの違うの。風間監督に、どうしても、会いたいのので仲立ちしろ、と脅されてね。昔のことと今のことの区別がつかなくなってきたんだよ、残念ながら。だから、話を訊き出すのは無理だよ」

風間「ははは、本人に直接答えを聞くような下品なことをする風間重兵衛だと思いませんか。」

竹脇「では、何のために?! 私だって暇な身体じゃないんだ」

風間「一度、直接、お会いしたかったのです。映像ではなく、生身の馳一生先生の姿を拝見したかったのです。まあ、コーヒーでもお飲みください。このブルマンはそれなりに飲めますよ。綾部、ブルマン二つ！ …綾部？」

綾部、馳をうっとり見つめて見ている。

綾部「(我に戻って) あ、ハイ直ぐに。」

と出て行く。

竹脇、蓋河をじろじろと見つめ始める。

円山「どうしたんですか? 見つめちゃって」

竹脇「いや、似ている、誰かに似ているんだ」

竹脇、蓋河を再び見る。

円山「今更なに言ってるの」

竹脇「(つくづく風間と蓋河を見比べて) それにして

も以外でしたね。風間さんと蓋河くんが一緒に仕事

するようになったとは」

風間「…ええ、そうですね」

蓋河「そうでしょうか、仕事は仕事ですから」

円山「なんの事ですか?」

竹脇「知らないの? この二人は昔、婚約してたんだ

よ」

円山「ええ!」

竹脇「あれほど仲の良いカップルもいないだろうと

思ってたんだけどね、結局別れちゃって、そして、

またこうやって仕事をしている。男と女の事は分か

らないね」

円山「(蓋河に) え、それって、いつ頃の話よ、女優

時代?」

蓋河「心配しないで。円山さんにプロポーズされる

ずっと前の話よ」

竹脇「(円山に) へええ、そういうこともあったんで

すか?」

円山「私の方は、片想いだったんだから、いいじゃな

い」

坪井「蓋河さんて女優だったんですか?」

円山「誰が言ったの?」

坪井「今、小父さんが言ったんじゃないですか」

円山「ウン、芸名を大泉玲子と言ってたなブレイク寸前

で謎の引退。あのまま続けていたら今頃、ハリウツ

ド・デビューしてたぞッ。」

綾部、ウエイトレスを連れて戻ってくる。

竹脇「そういえば、綾部君が二人の仲を取り持ったん

だよ」

綾部「え? (事情が判り) ああ、まあ、しかし、仲

を取り持ったなんて、そんな偉そうな。まさか二人

が付き合う事になるとは、思ってもいませんでした

から…」

馳「(綾部を凝視して) 君、私や法螺プロデュー

サーと同じだね。辛いかい?」

綾部「(笑って) …何のことでしょうね?」

馳「負けちゃダメだ。恐れてはいけなよカミングア

ウトを」

円山「カミングアウト?」

ウエイトレス、震えながら馳に注文を取る。

ウエイトレス「馳一生先生! ご注文は?」

馳「ミルクにチョコレートーナツ」

綾部、その言葉にポツと頬を染める。

蓋河「(綾部に) …綾部君でもしかして?!」

風間、俯く綾部を見る。

横では坪井も馳に見惚れている。

風間「…それにしても、先生はいつまでたってもお若

い」

馳、にこにこ微笑んでいるが、気づくと居睡

りをしていたりする。

風間「先生の作品は、全て拝見させて頂きました。特

にあの『疵万両』の華麗な殺陣は…」

風間、動きが止まる。

風間「!? …(眩く) まさか、そんなことが、いや、

しかし! …いや、そんなことがあってよい筈がな

い。しかし、『大スターなら何をやっても許される』

『実行犯が剣の達人』そして『男も見惚れるフェロ

モン』そうか! もしかしたら!!」

と出て行くこうとする。

綾部「監督、どちらへ?」

風間「少し、一人になりたい」

と出て行ってしまおう。

円山「巨匠、どうしたんだ？」

綾部「(居眠りしている馳一生を見ながら) 監督の気持ちは痛いほど解ります。本当の馳一生に会えたんですから。出来れば私も一人になって仮説をまとめたいと思います。今まで机上の知識だけで曲がりなりにも馳さんを演じて来ましたが、生の馳一生を見ることによって全ての謎が解けるような気がするんです。」

円山「では、解いてよ」

綾部「いや、だから気がするんです、；気だけです」

風間、戻って来て綾部を呼び寄せる。

風間「お前、馳先生に襲い掛かってみる」

綾部「は？」

風間「先生は事件後、顔を斬り付けて来る相手を鮮やかにかわすのを、自分の作品の売り物にしていただろう？」

綾部「はい」

風間「あれが本当かどうか、確かめるんだよ」

綾部「監督無茶ですよ。あの身体ですよ」

風間「いいからやれ！」

綾部、しおしお馳に近づく。

綾部「先生、ちょっとあちらを向いて立っていただけますか？」

竹脇「3分だけだよ」

馳、言われたとおりに立つ。

綾部「馳一生さん」

綾部、馳が振り向いた瞬間、襲い掛かる。

馳、鮮やかな身のこなしで綾部を組み伏せる。

馳「何奴？ 各々方、出会え！」

風間「よけた！」

綾部「痛っ！ すいません、すいません」

馳、我に返ると、呆けた様に席に座る。

風間「やつぱり、そうだ。自分から斬らせたんだ！」

竹脇「なんの事だ？」

風間「馳一生はよける事が出来た。それなのに斬られたって事は、あえて斬らせたって事だよ」

綾部「なるほど！」

風間「だからこそ、手術可能な程度の疵で、済ませることが出来たんだ。綾部分かったか!？」

綾部「はい！」

風間「お前が、否、馳一生が自ら進んで斬らせたんだ。それをヒントに、もう一度ロールプレイで、お前の想像力を俺に見せてみる」

綾部「はい！ 何か出来そうな気がしてきました」

竹脇「何が始まるの？」

綾部「風間組名物、ロールプレイです。」

竹脇「伊豆へは行かないの？」

円山「まあ、見ていて下さい。滅多に見られぬものが見られますぞ。」

風間「いくぞ！ 馳は綾部、朴役は円さんに戻そう。」

坪井「どうして、綾部さんで馳役を続けるんですか？ 元女優さんがいるのに」

蓋河「ちよつと止めてよ。いやよ、私は」

坪井「手下だからですか」

綾部「馬鹿、黙ってろ！ 早く帰って、テレビでもしろ！」

円山「；怖いの？」

蓋河「；私はプロデューサーですッ。もう二度と、演技はしないと決めて、足を洗ったのです。」

風間「大泉玲子は決して下手な役者じゃなかった。ただ、芝居をするには優しすぎた」

蓋河「；優しすぎるなんて初めて言われたけど、誉められてる訳じゃないわね。」

風間「そう、優し過ぎると云うことは弱いということだ。決して誉め言葉ではないッ。大泉玲子は『芸能の民』、否、『流浪の民』になる覚悟がなかった。詰り、人間の心の闇を表現する度胸がなかっただけの

ことだ。」

円山「亦、難しいことを。で、綾部君で続けるって事でいいのかな?」

風間「勿論です。男の役は男に。それに後輩演出家を育てるのも私の仕事の一つだと思ってるのでね。」

パチパチパチと拍手する一同。

竹脇「ブラボー!」

シャイに照れる風間、何故か挨拶しようとする。

風間「ええ、私、映画監督、風間重兵衛は...。」

馳「(風間の言葉を遮って) 監督、巻いていこう」

風間「...ヨイ、ハイ!」

☆ ☆ ☆

馳(綾部)、撮影所から出てくると、仲間と話しながら歩いて行く。

それをじっと見ていた実行犯(円山)、物陰から飛び出すと、前を歩いている馳に声をかける。みる。

実行犯「馳一生さんですね?」

馳、振り向くと実行犯を見据えたまま、微動だにせず、頬を斬り付けられる。

そのまま逃げる実行犯。

馳、顔から噴き出す血を抑えながら叫ぶ。

馳「私の顔はどうなっているのですか? 鏡を! 鏡を下さい!」

法螺(風間)が慌てて駆けつけてくる。

法螺「馳さん、しっかりするんだ! 馳さん!」

☆ ☆ ☆

風間「カット! さあ、何を感じた?」

綾部「...」

円山「何か笑ってなかった? 気味悪いよ。待構えられてるし」

綾部「悲劇の主人公みたいで、気持ち良かったです」

風間「なるほど、それから?」

綾部「多分当時の馳一生には、この事件が必要だったんじゃないでしょうか。抜き打ち移籍で日本中を敵

に回した形になってましたから。加害者から被害者に一発逆転出来るような事件が必要だったんじゃないかって、そんな風に感じました」

風間「おお! いいよ綾部! このまま一人芝居いつてみよう!」

馳「無駄なことです。」

風間「先生、起きてましたんですか。」

馳「違うのです。私の身のこなしが良かったからではありません。」

風間「では、どういう事なんですか?」

馳「...ほんのみじかい夢でも、とてもしあわせだった逢えてほんとによかった」

馳、再び呆け、あらぬ言葉を口走り始める。

蓋河「...だけど帰るあなた、泣かないと誓ったけれどそれは無理なことだと知った」

と続けてしまう。

馳、いつの間にか蓋河を抱擁している。

風間「都合よく呆ける爺さんだな。ホントに呆けてんのかね? お宅も何、合わしているのよ」

蓋河「どうしたのかしら、私」

竹脇「こら、風間君。何てこと言うんだ」

風間「あ、失礼しました。しかし、違うって言われてもなあ」

円山「私も違うと思う。手術可能な疵だったことは事実だけど。いくら身のこなしが良いといっても柳生石州齋じゃないんだから。寧ろ、実行犯の方のことだと思っな」

ウエイトレス、ミルクとチョコレートドーナツ

を持って入ってくる。

蓋河「そう言えば、実行犯は、捕まった朴成漢って事
でいいの?」

綾部「ですから、身代わりの可能性もあるんです。」

円山「朴は百本組の下っ端だったらしいからね」

蓋河「じゃあ犯人役がもう一人必要になるかも知れな
いということ?このままだとキャスティング出来な
いんだけど。誰でもいいですか?」

風間「真犯人の実像?…やはり実行犯が上手く斬れ
ばいいってことか?…そうすると?」

風間、ああでもない、こうでもない、とぶつく
さ言いながら歩き回る。

蓋河「もうあんまり時間無いんだから、早く進めてく
ださい」

風間「…そうだ! そうだよ、真犯人だ!」

円山「どうしたの?」

風間「この事件のもう一つの謎、顔斬りを実行した真
犯人は誰なのか? これを取っ掛かりにすべきだっ
たんだ! 一体真犯人はどこ誰なのか? それさ
え解明できれば、私の求めている二つの謎に対する
答えも、自ずと見えてくるはずですよ!」

円山「なるほど、真犯人探しか。なんだかワクワクす
るね」

蓋河「でも、警察でも特定出来なかったんでしょ?」

無理じゃない。」

風間「別に本当の真犯人を探そうと云う訳じゃない。
面白い仮説になれば誰でも良いんだ。綾部、取調べ
を受けたものうち、アリバイがないのが三人いた
だろう?」

綾部「ハイ。えー、馳一生の元付き人の山村満さん、
それから監督の伊東俊作、昔の恋人の吉野薫さんで
す」

風間「前から怪しいと思ってたんだ。その中の誰かが
真犯人だと面白い仮説になる。問題はどうかやって、
その一人を見つけて出すか?」

風間、考え込む。

坪井「みなさん何やってるんですか? 犯人を知っ
ている人がここにいるじゃないですか」

と、寝ている馳をこなす。

一同「ああ?」

竹脇「なるほどー風間監督が、どうして馳一生先生に
会いたがったのか、分かりましたよ。でも、一度閉
ざした口を、今になって開くとも思えない」

円山「竹脇さん、もしかして貴方も真犯人を知ってい
るのでは?」

竹脇「フフフ、ノーコメント」

風間「…俺は事実を知りたいのではない。面白い、興

味ある仮説を発見したいんだ。我々の想像力を發揮

して、そこから真実に辿り着きたいんだ。分かるか

坪井」

坪井「まあ、そういう事ならお好きにどうぞ」

ウエイトレス「どうして、そう云う監督のアーティス
トとしての狙いが分からないのヨ、このゆとり小
僧!」

風間「このゆとり小僧!」

綾部「ドキュメンタリーのタイトルは?」

風間「(素っ気なく)それはもういい。…これから綾
部・円山さん・蓋河プロデューサーの3人には、そ
れぞれ付き人・監督・昔の恋人を演じてもらいま
す」

円山「馳役は?」

風間「馳一生は、私がやります。そこで:」

風間、かばんから安全カミソリを二本取り出す。

風間「みなさんには、このカミソリを持ってもらいま
す」

円山「なんでそんな物持ってるの?」

風間「伊豆に泊まりだとはかり思ってたんでね! み
なさんがそれぞれの人物に完璧になり切る事が出来
るなら、その人物が真犯人だった場合、当然私の顔
を斬る事になるでしょう。兎に角、三人は其々の人

物に成り切ってくれさえすれば良いのです。真犯人でなければ、顔を斬ることは出来ません。しかし、真犯人なら顔を斬ることに成功するはずですよ！

綾部「ちよつと待ってください。感情がそうになったら本当に斬ることになってしまうという事ですか？」

風間「当然でしょう。この風間重兵衛、作品の為なら疵の一つや二つ、どうって事ありません。『男の顔は履歴書』ですッ。兎に角、私の顔を斬りつけた人間が真犯人です。肝心なのは、あなた方が完全に其々の人物に成り切ることです。」

蓋河「ちよつと待ってよ。私はやらないって言ったでしょ」

綾部「私も、出来ません。辞退させていただきます。」

風間「助監督のお前に選択権は無い」

綾部「(いじけて)…」

円山「我々の方が全然下手なだから、怖がる事無いよ。ただのロールプレーだし」

蓋河「やりませんよ、私。私が女優を辞めたとき、勿論、何人かの人が引きとめてくれたわ。諦めるな、これからだ！ 役もつき始めていたし、確かにこれからかも知れなかった。でも、私はプロデューサーになる方を選んだの。裏方の道を選んだの。監督が言うように私は、芸能の、流浪の民に成るのが怖かつ

たのよ。度胸も覚悟も無かったのよ。だから二度と女優には戻らないと自分に誓ったのッ。それをどうして今更！」

綾部「…私もです。」

円山「え？」

綾部、恥ずかしそうに下を向く。

風間「気持ちには分かるが、物理的に人間が居ない。それに女優に戻れとっている訳じゃない、只のホン作りのためのロールプレイだ。」

蓋河「…」

風間「それともプロデューサーとして大成功した今でも未だ、度胸も覚悟も無いと云うなら別ですが」

蓋河「…分かりました、やってみます」

綾部「…私もやってみます。」

風間「(綾部は無視し) そうか、やってくれるか」

蓋河「ただし、他の役に代えて下さい」

綾部「…私もです。代えて下さい。」

風間「どうして？」

蓋河「なんとなく嫌なのよ。馳先生の昔の恋人役は。」

綾部「…私もです。何となく嫌なのです、馳先生の付き人役は」

き人役は」

竹脇「その方がいいかもしれないね」

円山「元恋人が元恋人役ではね。分かる気がします」

蓋河「別にそういうことでは。」

綾部「…私もです。」

風間「だったらやってください。(周囲を見渡し) 女性はあるあなたしかいないんだから」

自分の出る番を窺っていたウェイトレス、ワ

アーツと泣きながら奥に引込む。

蓋河「…」

風間「(手を合わせて) 頼む、この通り！ 作品の為

なんだ！」

蓋河「…殺し文句よね。分かったわよ」

綾部「…私も、分かったわよ、です。」

蓋河「でも、一寸、外の空気を吸わせて頂戴。」

と出て行く。

風間「よし、じゃあ綾部からやるぞ」

と剃刀を綾部に渡す。

円山「しかし、そんな風に上手く行くのかね。スタニスラフスキー・システムかどうか知らないが。黒澤

明の別荘探すのと訳が違うんだから」

竹脇「え!? 君たちがやろうとしているのはスタニスラフスキー・メソッドなのかね? だったら危険

だ。このメソッドは、役作りのために自己の内面を掘り下げるため演技手かなりの負担がかかる側面がある。」

戻って来る蓋河。

竹脇「メソッドに心酔したマリリン・モンローは、役作りに専念しすぎた余り自身のトラウマにぶち当たり自殺したとさえ言われているんだ！特に蓋河さんが、吉野薫の役をやるのは止めた方がいい」

蓋河「…」

円山「竹脇さんは、吉野薫と面識があるのですね？」

竹脇「いや、これ以上は」

蓋河「…」

風間「他人を演じて生きた人間にするとは、そう云う

側面を持っているものなのです。スタニスラフス

キーに限らず。俳優業の習い事です！」

円山「でも」

風間「実際に撮影で役者に芝居をつけたことがない円

山さんには理解するのが難しいかもしれないが、少

なからず起きる現象です。また、そこまでの芝居を

追求しない限り我々の存在意義はないのです！映

画監督とはそういう人種なのです。」

坪井「凄い！正にスタニスラフスキー・システムが

試される時だ!!」

☆ ☆ ☆

綾部、風間、役作りの瞑想に入っている。やが

て、

馳役の風間、椅子に座っている。付き人山村役の綾部、隣に立っている。

山村「先生、しばらく待つようですが。楽屋に戻られますか？」

馳「いえ、ここで待ちましょう。…山村、君は私の付

き人になって何年になる」

山村「もう十五年になります」

馳「十五年か、長いな。あまりに長い。…いずれは君

を一人前の役者にと思っているながら、自分の撮影が

あれば、ついつい君を付き人として便利に使ってし

まう」

山村「光栄な事だと思っています」

馳「何が光栄な事ですか。…最近君の顔を見ている

と、私は辛くて堪らないのです。君の顔はもはや役

者の顔ではない。疲れきったサラリーマンのそれです。君はあまりにも、擦り減ってしまっ

た。君はあまりにも、擦り減ってしまっ

山村「…先生、この撮影所で私の事を名前で呼んでく

ださるのは、先生だけです。みんな「付き人さん」っ

て呼ぶんです。私の人生はそのまま終わるのでしょ

うか？先生、私は本当に役者になれるのでしょうか？」

本物の馳「…山村」

山村「…長い間、お世話になりました」

☆ ☆ ☆

源義経の衣裳を着た馳一生役の風間が付き人を従えて歩いている。

馳「時は昭和三十年十一月の夜、場所は京都は太秦のJO撮影所付近の林に囲まれた小道を行く、源義経の衣裳を着た馳一生。」

背後の声「馳一生さんですね？」

馳、振り向くと、山村がカミソリを手に突進し

てくる。

山村、カミソリを振り上げるが、そのまま止まっ

てしまう。

山村「…ダメだ…斬れない」

山村、その場に崩れる。

☆ ☆ ☆

風間「カット。付き人、山村満はシロか」

綾部「私には斬れませんでした」

風間「そうか、じゃあ田舎へ帰って百姓でもしてろ。」

どうせ監督にはなれないんだから」

綾部「！」

風間に掴みかかろうとする綾部を円山が、押さえる。

円山「綾部君、落ち着いて」

綾部「放して下さい。今なら斬れる！」

風間「それは、山村が斬りたいのではなく、お前が、

綾部明が斬りたいだけだ！ 綾部、ホン書いて持つ

てこい。諦めるのはまだ早い」

綾部「…はい」

竹脇「何だか、ロールプレイなのかプライベイトのこ

となのか区別がつかなくなってきたね。危険だ、

危険な香りがする」

風間「次、監督の伊東俊作。円さんの番です」

円山「よし」

と綾部から剃刀を受け取る。

☆ ☆

円山と風間、役作りの瞑想に入っている。やが

て、

馳（風間）「監督、なんでこんな甘ったるい、色恋の

シーンばかり撮るんです？」

伊東（円山）「会社の方針でね。女性にウケる映画に

したいんだと」

馳「女性にウケるって、この作品は男の友情がテーマ

なんですよ」

伊東「そうだけど、会社が決めたことには逆らえない

よ」

馳「あなたそれでも監督ですか？ 良い映画を納得の

いく映画を撮りたいんじゃないんですか!？」

伊東「会社に逆らえば、映画撮らせてもらえないの。

そうなったら良い映画撮れないでしょ。私は良い作

品を作る為に、会社には逆らわないの」

馳「じゃあこの作品はどうなってもいい、と言うんで

すか？ 今、より良い映画を目指さない人間が、ど

うして将来傑作が撮れますか！ …私は降りま

す！」

馳、去って行く。

伊東「…勝手にしろ！ 俺だって、好きでやってる訳

じゃないんだ。見習い時代から苦労して、ようやく

ここまで来たんだ。俺みたいな監督が、好き嫌いで

仕事選べるかよ！」

本物の馳「…監督」

☆ ☆ ☆

源義経の衣裳を着た馳一生役の風間が付き人を

従えて歩いている。

背後の声「馳一生さんですね？」

馳、振り向くと、伊東役の円山がカミソリを手

に突進してくる。

伊東、カミソリを振り上げるが、そのまま止まっ

てしまう。

伊東「…」

☆ ☆ ☆

風間「カット、伊東監督もシロカ」

円山「動機が弱すぎるね」

風間「まあ斬られないで良かったですよ。円さんも、

商業主義に完全に染まった訳じゃなかった、という

ことですね」

円山「…どうかな。…仕事に対する考え方の違いだか

らね。それで斬りつける事はないよ」

竹脇「やはり、演じている者と役がオーバーラップし

ているんじゃないか？ 危険だ！」

室井、戻ってくる。

風間「最後は昔の恋人、吉野薫だ。蓋河さん、頼むよ」

蓋河「(円山から剃刀を受取り)……ええ」

室井「……何やっているの？」

風間「とんだ所に、北村大膳」

室井「蓋ちゃん?! まさか、ロールプレイとやらに参加するんじゃないわよね。女優を辞めたときのことを忘れたわけじゃないわよね? あの時、風間監督にどういう仕打ちをされたのか忘れた訳じゃないわよね。二度と女優はやらないんじゃないの!」

なんで風間監督のためにここまでしなければならぬのよ!

蓋河「風間監督のためではないわ。」

室井「じゃあ、何の為にこんなことをしているの?」

と蓋河から剃刀を奪おうと小競り合いになる。

竹脇「風間君、これ以上は止めたまえ!」

風間「竹脇さん、余計なこと言わないで下さい。(蓋河に)さつきは作品の為だと言ったが、それだけじゃない事は、もう分かっているはずだ」

蓋河「……」

風間「俺達は、このロールプレイをやらなければいけないんだ」

蓋河、頷く。

風間「綾部、お前もだ」

綾部「……ええ? 私の出番はもう終わったのでは?」

風間「これからが本番なのは、百も承知しているはずだ」

綾部「……」

風間「まさかとは思いつながらも、薄々は気づいてたよ。お前の気持ちを知りながら、今まで知らぬ振りをしていて悪かったな」

綾部「……いえ」

風間「この十年、いつもお前と一緒にだったな。辛かったか?」

綾部「……いえ……幸せでした。」

風間「……そうか。決着つけなきゃならんな」

綾部「……はい」

風間「顔斬り事件の黒幕であり、馳一生のことを密かに愛していた、法螺プロデューサー役はお前だ」

綾部「はい」

事の成り行きに混乱していた室井、自らを勇気付けるように、

室井「(綾部に) Nobody is perfect」

室井、去って行く。

竹脇「止めたまえ! 止めるんだ!」

風間「いくぞ! よーい、ハイー!」

☆ ☆ ☆

蓋河と綾部、役作りの瞑想に入っている。

風間「(其々の人物の間を動きながら) 法螺仁は、初めて馳一生に会った時からその美貌に心を奪われ密かに想いを寄せていた。法螺は既に世帯を持つていたし、勿論、男に恋心を抱いたこともなかった。寧ろ、同性愛など男女を問わず汚らわしいものだと考えていた。それ故、自分の気持ちに戸惑い、認めることが出来なかった。しかし、一生がホモセクシャルであるというのは関係者の間では有名なことであり、叶わぬ恋でもないかもしれない、と云う淡い期待がなくなかった。……全ては、まだ、二人が世に出る前の話だった。」

やがて、馳一生(風間)を切ない眼差しで見つめていく法螺(綾部)。法螺を見る馳。

風間「一方、一生は、法螺の気持ちに気づきながらも親しい友情以上の付き合いはしなかった。一生は美しいものが好きなのだ。法螺は美しいというには程遠い顔をしている。」

一人の和服姿の女性が後ろ向きで登場。

——蓋河演じる薫。

風間「その頃、一生は、薫と云う女性を愛していた。法螺の遠縁に当たり、小太刀の達人で京都で殺陣の師匠をしている女性だった。その美貌は太秦界隈で

はつとに知られていた。同性愛のカモフラージュとするために法螺が殺陣の師匠として紹介したのだが、恋仲になるとは思いもよらなかった。何よりの驚きは、一生がホモでなくバイセクシャルだった、ということだ。」

馳、法螺、後ろ向きの薫、三者が三者なりの想いで、夫々の顔を見ていく。

風間「法螺の想いに気づきながらも薫に夢中になっていく一生を見ているうちに、いつしか法螺の愛情は憎悪に変わって行った。」

仲睦まじい一生と薫の様子を憎悪の籠った眼で見つめる法螺。

風間「そして、馳一生の名声が漸く映画界に知れわたり出した頃、ある事件が起きた。」

風間扮する馳が、竹梅の社長と話している設定の独り芝居。

馳「……と云うことで仲人のほうは宜しく願います。……? ……!? ……!? どういうことですか?」

待つてください社長! どうして駄目なんですか? ……それじゃ理由になりませんか、ちゃんと説明してください。一体何がおきたんですか? ……驚きません、どのような事実を突き付けられても驚きません。……え!? ……それは本当のことですか? 人にそ

のようなレッテルを貼ることはそれなりの確証があつてのことなんでしょね? ……薫のことを調べるなんてやり方が卑怯ですよ。……譬えそうだとしても、私は薫を愛しているんですから結婚します。……なぜ、いけないのですか? ……何を言っているのですか? ……薫だつて同じ人間なんですよ。私だつて河原乞食ジャンイデスカツ、なぜいけないんですか! ……世間? ……世間が許さない? ……世間に負けろと。……薫と結婚するなら映画界を引退しろという事ですか? ……私は今まで竹梅の為に精一杯仕事をしてきました。お願いですから、薫を取るか仕事を取るか、などという選択をさせないで下さい。

どうか二人の事を認めてください。……どうして、世間に従わなければいけないのですか? ……世間で何ですか? ……世間でどこにあるんですか?! 社長!

自失呆然と座り込んでしまう馳。

法螺、やつて来て馳を見つけると遠慮なく近づき胸倉を掴む。

法螺「お前、どうして婚約発表して二週間も経たない内に婚約解消したんだよ!? しかも、理由も何も云わないで。全ては、私の不徳の致すところでありまして、何だよ! このままだったら薫はどうなるんだよ!! 婚約発表の時に薫まで引つ張り出したか

ら今じゃあ薫は有名人だ、このままでは京都中の晒し者だぞ!」

馳「……全ては私の不徳のいたすところです。」

法螺「俺にも言えないのか? ……二人を引合わせた俺にも婚約解消の理由を言えないのか?! ……ふざけるなよ!」

馳「人間には、どんなことがあつても人に言えないことがあるのではないですか。言つてはならないことがあるのではないですか。分かつて下さい! ……このことを話したら、このことを話したら私は人間でなくなります。」

法螺「!? 一生、お前、まさか、あのことを知ったのか? ……薫のあのことを知ってしまったのか?!」

馳「これ以上は話せません。許して下さい! ……後生です。許して下さい!! ……兎に角、これ以上は何も言えない、貴方になら分かつて貰えるはずだ! ……薫と同郷の貴方になら!!」

法螺、転げ回つてもがき苦しむ。

法螺「貴様アア、世間に負けたな、世間に負けて薫を切り棄てたな!! 貴様に棄てられた薫はどうなる、薫の人生はどうなるんだ!」

馳「許してください! ……否、許して下さい、などとは言いません、見逃して下さい!! 後生です。見逃

して下さい！ 見逃してください！ 見逃してください！

法螺「一生、覚えているか？ 出会った頃の俺たちの約束を。」

馳「：『もし、私が大スターにでもなつて天狗になったら天誅を下して眼をさまして欲しい』」

法螺「『ああ、その時は必ず俺が醒ましてやる。』：でも、お前は未だ大スターではない。』

馳「恩に着させて、もらいます。」

馳、去りかけ、

馳「：世間でなんですか？ 世間でどこにあるのですか?！」

法螺「世間？ …世間なんて下らねえもんだが、その世間を気にしたり、負けたりする奴はもつと下らねえ。」

馳「だから、その世間は何処に?！」

法螺「何処でもネエツ、世間はな、世間は…。お前も役者なら自分で答えを見つけてみる。」

馳、恥じ入るように退場して行く。

風間「馳一生は、このスキヤンダルにも負けず、益々、大スターへの道を上り詰めていった。そして、三年後、移籍問題が勃発。『竹梅』は報復計画を法螺に依頼した。」

法螺を訪ねた馳一生。

馳「覚えていますよ。出会った頃の約束?！」

法螺「覚えているさ。そして、今や馳一生は押しも押されもせぬ天下の大スターだ。」

馳「そう、そして天狗になつてもいるのです。機は熟しました、私に天誅を与えて下さい!！」

法螺「!? ほう、面白いことを言うな。まさか、この法螺のところに『竹梅』から報復依頼があつたのを知つてきたわけではあるまいが。」

馳「凡その見当は。貴方も頼まれた以上、下手を売るわけにはいかないでしょう。『竹梅』も溜飲を下げ、貴方の顔も立ち、そして私の慢心を戒めると同時に野心を満たしてくれるような天誅を与えて下さい。明日の夕方、一人で撮影所を出ます。その時」

法螺「大した度胸だ。その度胸に免じて、命だけは勘弁してやる。良い事を教えてやろうか? 『竹梅』は、お前の顔を斬つて欲しいそうだ」

馳「：顔を」

法螺「そうだ、お前の命よりも大事な左頬をズタズタにしてやる。どうした、怖気づいたのか?！」

馳「いえ、出来るなら私も顔を斬つて欲しいと思つていたのです」

法螺「何?！」

馳「長谷川一夫先生や美空ひばりのごとく顔を傷つけられてこそ初めて天下の大スターになれる国なので、この日本は。…私は、真正正銘の大スターになりたいのです。一か八かの野心です!！」

法螺「なるほど。しかし、それは少し虫が良すぎるんじゃないか。この一件をも自分の為に利用しようとは…腐つたな一生! 望み通り天誅を下してやる!！」

馳「：」

法螺「ただし手を下すのは俺じゃない。お前の良く知つている人間、しかも恨みを持っている者にやつてもらおう」

馳「：薫?！」

法螺「小太刀の名手とだけ言つておこう。傷の付け方も自由自在だ。お前の希望を伝えたくて、その人がどう出るか…その人にした事を懺悔しながら明日を待つ」

馳「分かりました。譬えどのような結果になろうとも、私に文句は言えません。言える筋合いはないのです。それは貴方が一番ご存知のはず。…貴方の気持ちにも応えられなかつたし、世間とシステムに負け薫も棄てた。だから、あなた方になら斬られても仕方がないので。薫になら命より大事なこの顔

を、傷つけられても仕方がない……」

法螺「一生。どうやら世間の居所が判つたらしいな。」

一生、哀しそうな笑みを浮かべ退場。

法螺、一生を見送る。薫役の蓋河、やつてくる。

薫「法螺から小刀を受け取り」分かりました。請けましよう。私が愛したあの頬に、二度と消えぬ斬り疵を刻み込んでみせましよう」

法螺、退場する。

薫、小刀を振っている。

どこからともなく、薫に罵声が浴びせられる。

声①「出て行け！ ここはお前の来るところじゃない！」

声②「思い上がるなよ！ お前みたいなもんが、天下

の馳一生と結婚できるわけないんだ！」

声③「あの男を許すのか!？」

声④「首を狙え！ 頸動脈を狙うんだ！」

声⑤「殺せ！ 殺せ！」

声⑥（ウェイトレス）「アイツだつて、河原乞食じゃねえか！」

薫、小刀を一心に振り続ける。

一生、登場する。

薫、小刀を捨てて一生に近づく。

薫「私、一生さんに話してないことがあるの。」

馳「なんだい？」

薫「ダメ、言えない。言つたら一生さん、私の事嫌になる」

風間「カット、カット、カット！ 何だ、その芝居は！

この場面で薫が一生の顔を見て話せるのかよ？ そんな中途半端な芝居で薫の真実がつかめるのかよ！ もっと薫の気持ちになれよ、薫の人生を考え続けろよ！ 狂気を持つんだ、修羅場を自分の内部に引きずり込むんだよ！ もう一度ッ。」

薫「……」

風間「もう一度！」

薫、暫く考えているが、一生の背後から近づき背に顔を埋める。

内山田洋とクールファイブの『恋唄』が流れ出す。

す。

薫「……私、一生さんに言つてないことがあるの」

馳「何だい？」

薫「ダメ、言えない。言つたら一生さん、私の事嫌いになる」

馳「ならないさ。君にどんな秘密があつても、私の気持ちは変わらないよ」

薫「馳の胸に飛び込む」一生さん！

馳「薫を抱きしめて」一緒にしろ。」

暗転。

薫「私は一生さんを怨んでなどいません。私が怨むのは、世間と世間を怖れる貴方の弱い心です。どこに在るかも判らない世間を何故、怖れる必要があるのです。」

馳「……世間は、世間は私の心の中にある」

薫「!? 一生さんと私の間には、世間などはいらぬはず！」

馳「……しかし、切り捨てても切り捨てても、トカゲの尻尾のように蘇ってしまう」

薫「ならば私のこの愛で、貴方の心に巣食うその世間

を、一刀両断してみせましよう」

応えず去る風間。

本物の馳「……薫」

暗転。

歩いてくる一生の背後から声がかかる。

薫「馳一生さんですわね？」

一生、振り向くと後方に薫が立っている。その姿を確認すると微笑む一生。薫も微かに微笑み、次の瞬間疾風のように近付き剃刀のようなもので一生の頬を一閃する。その時、「天誅」

と発する。左頬を押さえる一生、薫と目が合い

微笑む。

駆けつける法螺役の綾部。

法螺「一生、大丈夫か？」

と傷口に触れる。

風間「一生の疵は、竹梅の発注どおり二枚の剃刀による長さ十五cm、深さ二cmに及ぶ裂傷だったが、奇跡的に綺麗に縫い合わせることが出来た。担当医師は、後に切り傷が余りに鮮やかだったからだと漏らし、一生の俳優生命は皮一枚で大逆転を呼び起こし伝説となった。」

本物の馳「…ほんの みじかい夢でも」

薫「引き取って」とても しあわせだった」

法螺「(続ける) 逢えて ほんとによかった」

馳(風間)「(も続けてしまう) だけど 帰るあなた。」

…この傷は、私が自由になれた証です。」

法螺「…あの傷は、私の失恋の証です。」

薫「…その傷は、私の愛の証です。」

ロールブレイを見ていたウエイトレス、感極まって、
ウエイトレス「…何ゆえにむすばれないか 出遭う時
が 遅すぎたのか」

と独り言のように歌い出すと、円山、坪井、竹脇も独り言のように歌い出す。

「ひと前で 口づけたいと 心からそう思う 儂い

だけの 恋唄」

☆ ☆ ☆ ☆

風間「カット！」

涙をこらえて風間がカットをかける。

綾部「監督、大丈夫ですか？ 蓋河さん！ ホントに斬ることないでしょうか！」

蓋河「私、私、どうしたのかしら!？」

風間「いいんだ。想定内のことだ。」

竹脇「蓋河さんが薫に成り切ったというより同一人物に思えた！ だから言わないことではない！」

円山「やはり！」

蓋河「…その傷は、その傷は」

竹脇「貴女と薫さんの愛の証なんだよ」

蓋河「ウソ！ 嘘よ!？ 私は薫さんとは違うッ、風間に棄てられてなんていない！ 私は自分の意志で風間と別れたのよッ」

風間「勿論、君は薫ではない。しかし、君が薫の全てを理解し、自分のことと感じて演じた結果が全てなんだ。君の仕事は素晴らしかった。」

竹脇「終に風間監督は、大泉玲子から一世一代の演技を引き出すことが出来た。」

風間「ロールブレイの結果が事実であろうとなかろうと、我々にとっては、やはり薫が真犯人だったと言

うことだ。これで事件後の馳一生のモチベーションが分かった。これで全て謎が解けた」

見回すと一同の目に涙が溢れている。

馳一生の眼にも涙が溢れている。

綾部「いけますよコレ！ 相当良いですよ！」

坪井「監督、僕、感動しました!？」

風間「感動とは心で感じることであつて安易に口にするべき言葉ではない。口に出すとチープになる。」

坪井「はいッ、心得ておきます。」

風間「止したまえ、ここは軍隊ではない。よく映画作りを戦争に譬える輩がいるが、映画は戦争と違い破壊ではない、創造だ。自由に宇宙に向かって創るものなんだ！」

坪井「監督！ 坪井朔太郎と申します。弟子の一人にお加え下さい！」

風間「見損なつてもらつては困るッ。俺に3Dが撮れるか！」

蓋河「待って！ こんなもの上映できる訳無いでしょ。そりゃあ圧力もかかるはずよ。今の話はなし！」

この『貌斬り』は全国四百館で公開される大作なの。メジャー作品なの！（風間に）あなたと別れてから、私は仕事一筋でようやくここまで来たの！それをぶち壊す気!? 感動的ではあるけど、あの『カムイ列伝』でも避けて通ったようなややこしいテーマは自主制作でやって！ 兎に角、恋愛シーンを増やして！ 今の話はなしです!!」

呆れ返りながらも諦め顔の一同を尻目に風間は蓋河の頬に平手を放つ！

風間「まだ分かんのか！ この『貌斬り』が最高の恋愛映画だということが!!」

蓋河「!? …」

堪え切れずに風間の胸に飛び込む蓋河。

風間、蓋河を受け止め、強く抱き締める。

『恋唄』更に盛り上がって…。

完